

短編児童小説部門  
第31回 琉球新報児童文学賞受賞作品

螢火



受賞者の言葉

やんばるの森に、いつぴきのキジムンがすんでいた。赤い髪に金色の目。ガジユマルの氣根のような長い手足。口にはするどい歯がひつり生え、ネズミでもコウモリでも、頭からバリバリと食つた。

キジムンにはるしきな力があつた。おなかのそこにグット力をため、口を大きく開けると、どのおくから無数の火玉が飛び出すのだ。火玉はあちこちへ飛んでゆき、木の枝に青い炎をともした。そんな晩は、森の木々ですらワセワサと枝をゆり、キジムンはおどりくるつた。人々は怖がつて、森に近づくことはしなかつた。

森はキジムンのもので、キジムンはあるつらかな春の日。森のはずれのティダ岩の広場に、四人の人間がやつて来た。大人の男と女に、子供もが二人。男は「礼する」と声をほりあげた。森の神さま。どうか、この森に畠を作り、家を建てるのあるしてください」（なんだつて！）

キジムンは頭にきた。人間が四人も森にいわるなんて、ゆるせるものがあるのに気づき、「口ロツ」と考へた。どうおれへのうまいを忘れないふと、強いしせんを感じた。赤い髪に向けると、子供の人がじつとキジムンを見ていた。キジムンはギクリとし、自分の体を眺めました。だいじょうぶだ。肌も赤い髪も、こかげでは黒ずんで目立たない。「あそに、変なのがいる。子供もがこころを指す。もう一人（よく、今のうちにとつちまえ）の子供も、目をすがめてのひあがつた。

「どうや? 嘘つき。何もいない

一つの「キジムナー」

このたびは輝かしい賞をいただき光栄に思つております。

最初にこの物語が思い浮かんだとき、「童話」という形式でしか語れないな」と考へ

り、児童文学という形になりました

た。ですが、「子供に読んでも

らう」という大前提が頭の中になかつたため、はたして子供たちがどのような感想を抱くのか、興味深いです。

物語の中でキジムンは、最

初と最後で外見が変化しま

す。最後のキジムンは、水木し

いえージとしてありました。

水木先生のキジムナーは黄

色の毛玉に手足が生えた「た

こ焼きおばけ」みたいな妖怪

です。沖縄では定番の赤髪の子供

のキジムナーとはぜんぜん似

ておりません。

この

なか

の

なか

の